

# CHILD RESEARCH NET

子ども学 (Child Science) 研究機関  
チャイルド・リサーチ・ネット (CRN)

## ニュースレター

<http://www.crn.or.jp>

vol.1

創刊特別号

### ニュースレター 発刊にあたって

チャイルド・リサーチ・ネット (CRN) は、設立13年目に入るにあたって、サイトリニューアルを行い、ニュースレターを発刊する事となった。この機会に、更に多くの方々にCRNの目指しているものを御理解頂き、より積極的にわれわれの活動への御参加をお願いしたいからである。

CRNのそもそもの始まりは、Norwegian Center for Child Research (ノルウェー国立子ども学研究センター) が1992年にベルゲンで開催した国際会議“Children at Risk”「危機にある子ども達」の終了後、出席した各国代表が集まって開かれた非公式の会合にある。そこで、1989年の国連で認められた「子どもの権利条約」を受け、21世紀に向けわれわれは何をすべきかが話し合われた。その結果、ともかくも世界の子ども問題に関心を持つ学者、研究者、実践者をインターネットでつないで、協力して考えようという事になったのである。

考えてみれば、これは北欧ならではのアイデアである。第1に、北欧の国々は子どもを大切に国民性がある。例えば、スウェーデンのエレン・ケイは20世紀冒頭に「子どもの世紀」を発表しており、ノルウェーでは「子どもの日」と「憲法記念日」は同じ日であり、フィンランドでは戦後、子どもの包括的な医療・保健を目指す「子どもの城」を作った。その上、インターネットを利用するという、ITの発達した国、ノルウェーの発想そのものにも感銘を受ける。

1996年、国立小児病院を退官した機会に、この国際的な動きに対応すべ

く、ベネッセコーポレーション会長 福武總一郎氏 (当時は社長) をお願いして、会社の事業とは関係なく、中立的な研究機関としてCRNを立ち上げさせて頂いた。当初は日本語版と英語版であったが、2005年に中国語版が加わって、現在3つの言語で活動している。皆さん方の御支援のお蔭で、月間アクセス数は日本語版約50万、英語版、中国語版がそれぞれ約15万となっている。

あらためてここで、CRNの目指している事を整理してみたい。20世紀に、子どもに関係する問題を研究する学問は大きく進歩した。小児医学然り、小児心理学然り、小児行動学然り。しかし、問題解決となると、その多様性も関係すると思うが、まだまだである事は御存知の通り。それに対応するものと考えられるが、北欧の国々では1980年代末より“Child Research”、イギリスでは1990年代に入って“Child Studies”と、子どもに関係する学問を統合し、包括的、学際的、環学的に研究して、問題解決を図ろうとする動きが出てきた。私達はそれを「子ども学」“Child Science”とした。人間の生物学的側面と社会的側面を併せて科学的に捉える“人間生物学”“Human Biology”、更には“人間科学”“Human Science”の子ども版とも言えよう。

CRNとしては、上述の学問的な立場を基盤にして、子どもに関心を持つ色々な専門家、実践家、研究者、更に親は勿論の事、出来るならば子ども達自身も加わって、皆が一同に会してネット上でまず話し合う事が目的である。

そして、「子ども学」の立場から問題の検討を進め、その成果をCRNで発表したいと考えている。CRNはこの様にして、「21世紀こそ子どもの世紀に」したいと願っているのである。

関係の皆様方、どうぞ私達の意図を御理解頂き、一緒にわれわれの目的に向け進もうではありませんか。



Child Research Net 所長

小林 登

### チャイルド・リサーチ・ネット (CRN) とは?

- 「子ども学」研究所です。「子ども学」を柱に、インターネットによるネットワークと、シンポジウム、講演、ブレイショッブなどの研究活動を生かし、世界中の研究機関や研究者と交流しながら、子どもを取り巻く諸問題の解決に取り組んでいます。